

沖縄作戦に於ける

独立混成第44旅団第2歩兵隊第1大隊史実資料

昭和22年3月25日

第32軍残務整理部

部隊経歴の概要

- 昭和19年6月29日 富山丸遭難事件、動員関係日時不詳
残存者500名にて仮編宇土連隊を編
成（於 沖縄県国頭郡名護）
- 8月16日 西部第17部隊に於いて独混44旅団
第2歩兵隊の動員完結
- 18日 西部第17部隊出発
- 自18日
- 至27日 鹿児島県立第1中学校に於いて宿営
- 8月28日 鹿児島港出帆（大信丸）
- 自8月29日 大信丸火災のため奄美大島名瀬港に不
時寄港し名瀬国
- 至9月 1日 民学校及び中学校に宿営
- 2日 名瀬港出発（履門丸）
- 4日 沖縄県国頭郡名護港着、上陸名護国民
学校及び第3中学校宿営
- 6日 仮編宇土連隊第2歩兵隊要員並びに現
地招集兵を以て独混第44旅団第2歩
兵隊の編成着手
- 12日 編成完結
- 自 9月18日
- 至10月 2日 伊江島飛行場設定特援作業に従事
- 7日 本部半島真部山、崎本部、桃山地区の

-45-

2874

防衛に任せらる

10日 南西空襲

11日 桃山地区を移動し真部山、建堅背後高地の配備完了
陣地構築に専念す。

11月27日 伊江島進駐の命到る。

12月 1日 伊江島進駐

3日 部隊は進駐と共に以前より同島に駐屯地しありたる独立速射砲第7大隊第3中隊（隊長諸江大尉）独立機関銃第4大隊第3中隊（隊長小川中尉）を指揮下に収む部隊は各分遣隊を「マジヤ」灯台附近（永徳少尉指揮の2ヶ分隊）山山附近（橋本少尉指揮の2ヶ分隊）「ミヤト」原（前田中尉指揮の2ヶ分隊、独機1ヶ分隊）の3ヶ所へ出す。

昭和20年1月22日 敵機動部隊による空襲

3月 1日 敵機動部隊による空襲

3月上旬 現地防衛招集による防衛隊（約900名）伊江島へ来島駐屯、之れと飛行場大隊（部隊長田村大尉）及び井川部隊の三部隊を以て伊江島守備隊編成され井川少佐伊江島地区隊長となり、各部隊の守備担当区域を決定す。

即ち井川部隊は東飛行場を含まざる以東地域、田村部隊は飛行場地域、防衛隊は「マジヤ」山山地域一帯。

此の担任決定により部隊は灯台、山山の分遣隊を本隊に復帰せしめ同時に伊江城跡山東方に対する陣地の強化を

許る。

3月上旬 田村飛行場部隊に対し伊江島飛行場破壊並びに本島への引揚命令下達さる、井川部隊及び防衛隊の各一部も破壊作業を支援す。

22日 敵沖繩来寇、敵艦載機伊江島来襲

24日 甲号戦備発令

4月 1日 敵嘉手納、北谷各方面上陸

11日 本部半島八重岳連隊本部との連絡途絶

15日 敵伊江島上陸のため艦砲射撃開始

16日 敵伊江島山山海岸に上陸戦闘開始さる

17日 敵新波止場方面より新上陸

自 17日 夜

至 18日 拂曉 部隊夜襲を敢行

18日 学校高地の攻防戦開始、ミヤト原分遣隊奮戦玉砕

19日 学校高地、墓地附近陣地の争奪戦

20日 学校高地方面に対する総攻撃

21日 最後の突撃

21日以後終戦に至る間残存者による遊撃戦

1 戦闘経過の概要 其の1

敵沖繩来寇より伊江島上陸に至る間

自3月23日 至4月15日

- (1) 3月23日0700 敵艦載機編隊を以て伊江島来寇乙号戦備発令。

- (2) 24日 敵艦載機来襲。島尻郡澁川、中城湾正面に敵機動艦隊出現、艦砲射撃並びに慶良間列島上陸の情報を聞く、甲号戦備発令、各隊は直ちに配備に就き警戒を厳にす。
- (3) 3月26日1300より約4時間に亘り敵の艦砲射撃は伊江島飛行場、部落、海岸線一帯に加えらる。
- (4) 3月27日 敵伊江島上陸の算大なりとの連隊情報あり、大隊は障地、資材の掩護整備に努む。
- (5) 4月1日 敵嘉手納北谷正面に上陸開始。
- (6) 4月8日1700 敵B-24二機伊江島、東海岸に対する第1中隊の墓地障地を爆撃、その一弾は松岡伍長の率いる1ヶ分隊の障地を直撃し松岡伍長以下5名戦死す。
- (7) 4月10日 敵上陸軍本部半島伊豆味方面を攻撃。
- (8) 4月11日 本部半島八重岳連隊本部との無電連絡途絶す。
- (9) 4月12日1300 敵戦艦よりの砲弾伊江城山南側腹の第1機関銃中隊棲息掩蔽部に命中し13名を埋没す、大隊本部員、第1機関銃中隊員徹宵救出に努め、堂園少尉以下7名を救出爾後他の死体を発掘す。
- 1700 敵B-24の投下爆弾、城山西側中腹の独立機関銃障地に直撃し分隊長以下約20名即死す。
- (10) 4月15日早朝来、伊江島周辺には戦艦2隻を含む大小50余隻の敵艦艇遊弋しありたるが1000頃より伊江島に対し一斉に猛砲撃を開始す。敵弾は伊江島南海岸一帯、飛行場、部落、城山障地地区等至る所に飛来し、其の猛烈なる事言語に絶す1800砲撃終了後伊江部落は全て廃墟と化し城山は一木一草を止めず山容あらたまれり。
- 部落の地上施設は極度に破壊されたるも、人員の損害は極めて軽微なり。
- 此の猛砲撃により敵上陸の切迫せるを察し之れに備ふる各種命令を発せらる。

2 戦闘経過 其の2

敵伊江島上陸以後

昭和20年4月26日以後

(1) 4月16日

戦闘開始時配備要図

ア の日払曉より伊江島の周辺は戦艦、重巡を含む約60隻以上の艦艇を以て包囲せられ、前日に優る猛烈なる艦砲射撃を開始す。

此の掩護射撃の下に敵は払曉より中飛行場南端附近の山山海岸より上陸を開始す。

中形戦車数10両を主体とする敵は一気に同正面を防備しありたる田村飛行場部隊及び防衛隊の障地前に殺到しその一部は早くも壕上に馬乗をするに至る。

飛行場部隊柴田少尉は小隊を率いて敢然壕より躍り出て戦闘を交え全員壮烈なる戦死を遂ぐ。

防衛隊、田村部隊の爾他の各隊は苦戦奮闘しつつ、夜に入るを待ちて敵重囲を脱出斬り込隊を編成して遊撃戦に転ず。

防衛隊の一部は「マジヤ」にある同部隊本部に集結し部隊長儀保中尉の指揮下に専ら山山方面への遊撃戦をに任ず。

田村部隊の大部は同夜田村大尉と脱出して遊撃戦を展開しつつ井川部隊と合流せんとして伊江城山方面に転進す。

イ 1000頃田村部隊よりの下士官伝令により敵上陸の報告を受けたる井川少佐は部隊に命令して警戒を一層厳ならしめ、生死勝敗を超越し、死して悔なき戦闘を遂行せん事を要望す。

ウ 1300 敵中形戦車数両城山西方1Km附近に出現し西？
進し来る。

之れに対して我が独速は的確なる射撃を加え瞬時にしてその3両を擱座せしむ、驚きて後退せんとしたる戦車1両は我の敷設したる小機雷により大破擱座す。

エ 敵は水納島に砲6門を揚陸す。

オ 上陸軍の詳細を偵察する為第2中隊橋本勇二少尉を長とする将校斥候同夜山山方面に進発す、同斥候は敵中深く潜入して偵察中敵の包囲に陥り、少尉は重傷を受けたるも、辛うじて脱出、その報告により敵は山山海岸飛行場附近に宿営しその兵力は戦車数10両を含む約2000なりと。

カ 各中隊4組乃至7組計約20組の斬り込隊編成せられ日暮より夜半に互り飛行場方面に進出その約半数は接敵に成功して戦果を上ぐ、その確認されたるものの戦車7両擱座、幕舎3破壊。

各隊共下士官兵数名は爆雷を抱いて戦車と共に四散したりとの報告あり。

(2) 4月17日

ア 1000頃敵は艦砲及び水納島の砲の熾烈なる掩護射撃下に大型輸送船約70隻、多数の上陸用舟艇水陸両用戦車を以て新波止場より旧波止場に互る南岸一帯に新上陸を開始す。

その兵力約6000、新波止場には飛行場設定機材らしきものを揚陸す。

イ 同正面守備の第2中隊及び第1機関銃中隊は既設陣地に據りて此の敵に猛攻を加え敵に多大の損害を与ふ。

ウ 第1機関銃中隊長満留中尉は部下数名と共に本夜水納島に泳ぎ渡り同島にある敵の砲を爆破せん事を大隊長に具申し、爆雷並びに浮揚機材を携行して進発す。

エ 大隊は敵の態勢未だ整はざる今夜半を期して大隊の3分の

2の兵力を以て波止場方面の敵に対し夜襲を敢行、之れを撃退せんとす、残余の兵力は城山西方の敵の警戒に任ず。

夜襲戦の配備要図左の如し

夜襲戦配備要図

各中隊は18日0100迄に攻撃準備を完了し0130より攻撃を開始す、我が主攻正面は新波止場に指向され奇襲に成功して敵に相当の損害を与えたるものの如きも暗夜の為詳細不明なり。

敵は夥しき艦砲、迫撃砲並びに戦車を以て我に応戦殊に我が重機陣地には敵砲弾集中し、約1時間余にして、その2銃の破壊、死傷12名を出せり。

激闘は払暁迄継続されたるが敵の猛砲撃により遂に波止場への進出は成らず払暁に至りて攻撃を中止、各隊夫々固有陣地に引揚ぐ。

(3) 4月18日(要図3参照)

4月18日戦闘配備要図

ア 城山西方の敵は依然近接せず、南に廻って部落西端の第2中隊、第3小隊(隊長児島少尉)正面を衝かんとする態勢を取り、又北に進んで戦車約10輛を主とする敵は城山を遠く迂回する如く北海岸に沿い東進して1000頃「ミヤト」原に分遣せる第1中隊前田中尉指揮の2ヶ分隊及び独機1ヶ分隊の正面に来襲す。

中尉以下孤軍勇戦奮闘したるも殆ど全員戦死す。

イ 敵は1000頃より我に対し本格的猛攻を加え來たる。

即ち新波止場方面の敵の主力は南より部落及び学校高地を攻撃し来たる、その主体は戦車約40～50両にして後方には多数の野砲、迫撃砲を有し、敵機は終始低空して地上の敵に協力す。

敵主攻正面を守備する平良中尉の率いる第3中隊及び中釜、吉見両少尉の指揮する第1機関銃中隊は此の困難の中にあつて終日死闘を繰返し敵艦砲弾雨下で高地に迫る戦車群を重機、擲弾筒と肉攻にて反撃し陣地を固守す。

ウ 兩岸の敵の一部は漸次東方に進出し、東海岸より城山方面を衝かんとして、午後女山の東北方に連なる墓地陣地に戦車約10両を以て攻撃し来る。

同陣地守備の第1中隊高野少尉は1ヶ小隊を以て勇戦善防、遮蔽物乏しく防御困難なる其の陣地を能く確保す。

(4) 4月19日 (要図其の4参照)

4月19日戦闘配備要図

イ 敵は此の日早朝より再び学校高地及び墓地陣地に対して砲撃と戦車群を以て猛攻を加え来る。

第3中隊及び1機中隊は連日奮戦に死傷続出弾薬亦欠乏するに至る。

平良中隊長は此の日指揮班員と共に皇居を遙拝して戦闘に望み惨烈なる防御戦闘を繰返して陣地を死守したるも、敵の砲撃は苛烈を極め平良中尉以下将兵の多数は戦死し1000頃には遂に敵戦車群は学校高地上に進出するに到る。

ウ 独速隊長諸江大尉は自ら部下を率いて学校高地北側の平地に進出、第2中隊の掩護下に接敵、小銃並びに手榴弾を以て高地上の敵を撃退し高地の奪回に成功す。

敵は再び高地の奪取を企図して高地東端の道路より戦車進

出し来る。

命により永徳少尉指揮の大隊予備隊及び生森少尉指揮の大
隊本部員並びに転進し来たれる田村部隊の將兵は学校高地の
救援に出動し激闘は2200に到る迄継続せられ、高地を我
が方に確保す。

エ 此の日午後城山東北方より敵戦車10数両は歩兵を伴い東
北側の1中隊、独機の陣地正面に來襲す、我が各隊は既設陣
地に拠りて之れを反撃す。

(5) 4月20日～4月21日

4月20日夕の戦闘配備要図

ア 敵は朝來猛砲撃と戦車を以て総力を挙げて高地、墓地陣地
、城山陣地に猛攻を加え來たる。

イ 昨夜の命令により、部隊は西方に対しては一部の兵力のみ
を残して西方の警戒に任じ他は全力を以て学校高地及び東方
の敵を反撃するに決す。

野砲一門、速射砲の一部は陣地を転換して同じ方面の敵に
指向せらる。

ウ 我が部隊必死の奮闘防戦に拘らず、連日の激戦に各隊共死
傷多く弾薬欠乏の状態にありて、その苦戦言語に絶したり。
午前中既に敵は再び高地上に進出して、砲、戦車の放列を敷
き一部は高地北側に進出し来る。

エ 午後に至るや敵は更に城山西方より戦車を以て攻撃し來た
る。

之れを遷えて第3中隊(草牧中尉指揮)及び独速、独機の
各部隊は陣地より防戦す。

オ 更に城山東北方より敵戦車群の猛攻を受くるに到る。

カ 此の日の激闘に於いて第2中隊長大崎中尉は学校正面の奮

戦に斃れ、高野少尉（1中隊）山下少尉（独逸）向山准尉（独逸）は戦死し児島少尉（2中隊）は重傷を受け、爾他の将校、下士官兵次々に傷つき斃れて我軍血泥の苦戦のうちに日は漸く暮れたり。

敵戦車群の鉄環は此の時既に伊江島最後の陣地たる城山複廓陣地を包囲しあり。

キ 1900頃城山戦闘指揮所より

「敵上陸以来5日間、我が将兵は優秀装備を誇る10倍に余る敵軍を避えて連日連夜勇戦奮闘、敵に多大の損害を与えたるも我も亦将兵相次ぎて斃れ弾薬は欠乏を告げるに到れり茲に於いて我は残存せる全兵力を以て今夜半を期し敵に最後の鉄槌を加えんとす……。」旨の命令が伝へられる。

ク 連日の損害により此の突撃に加わり得たる者は将校約十名、兵約百数十名と推算さる。狭小なる地域に集中する砲弾のため行動は阻害し出撃したるは4月21日0230頃なりき井川部隊長、諸江大尉の率いる主力2隊は学校高地方面に向かい、草牧中尉以下の1隊は飛行場方面に出撃す。

ケ 此の時城山を包囲する敵戦車群よりする戦車砲機銃の弾雨は猛烈を極め此の弾雨の中に在りて第1中隊長吉岡少尉以下多数の将兵は斃れ、井川部隊長も亦学校高地前面に於いて壮烈なる戦死を遂ぐ。

コ 斯くて指揮官を失い戦友と別れた極少数の兵は数人宛或は各個に潜在して遊撃戦に移行し終戦に至る。

雑

- 1 防衛隊長儀保中尉は4月19日頃「マジヤ」の壕内に於いて自決す、以後防衛隊は解体状態となり、各個に遊撃戦を行う。
- 2 田村飛行場大隊長は4月16日夜脱出して4月18日夜井川部隊戦闘指揮所に来たり。
後退し来れる同部隊将兵を指揮す。

3 米誌「イエジマ、デイリーニュース」9月3日号より

伊江島は碎くに難い果実であった、琉球列島に関する戦況報告は沖縄本島にのみ集中しているが、伊江島攻略はその困難さに於いて他の二つの島即ち「カレヤン」島、及び硫黄島に於ける血腥い戦闘と類を同じくするものであった。

第77師団は5日間に亙る手強い戦闘の後伊江島を攻略した。

伊江島は日本本土進攻の空の路よ拓く意味に於いて重要であった、伊江島占領に於ける最大の困難は伊江城山の制圧にあった。此の山は海拔601フィート、コンクリートの家々の部落の背後に聳えて三群の「トーチカ」が取囲み全山が砲座と変わっていた、全山が地下隧道により連絡されて堅固な要塞を形成し、此処に五千の日本兵が拠っていた。

A Dブルース少将の率いる第77師団は俊敏な日本軍と相対した日本軍はあらゆる物を偽装して隠蔽し我々の揚げ足を取らんとした。

彼等は島の西部に於いてはわざと弱い抵抗を示した。それで我々は西海岸を突破して伊江城山周辺に備へられた敵の牙城へ嵐の如く突進した。

然し第77師団は盲目的な無理な攻撃はしなかった。

彼等は4月15日上陸し、16日朝飛行場を攻略し注意深く進んでその日の午後に城山の敵の虎穴へ進んだ、かくて瞬時にして血みどろの闘争が展開された。

日本軍はその既設障地寄り第77師団の喉元を見下して弾雨を注いだ、然しながら日本軍は充分の武器弾薬を持っていなかった

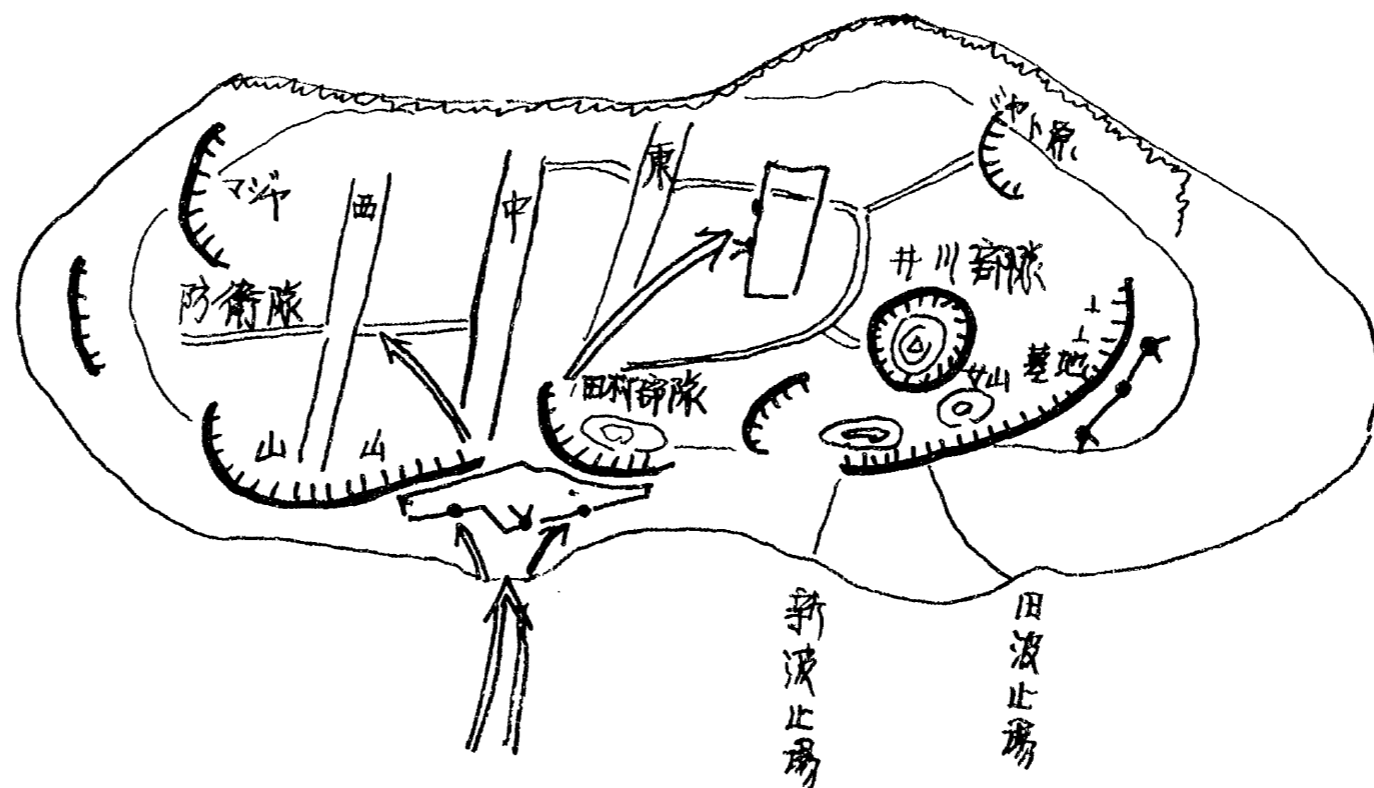
4月21日我々は伊江島を占領した。然しながらそれで終結したのではない。

分散的な遊撃戦は其の後も続いて7月3日迄継続した。

井川隊

戦斗開始時配備要図 4.16

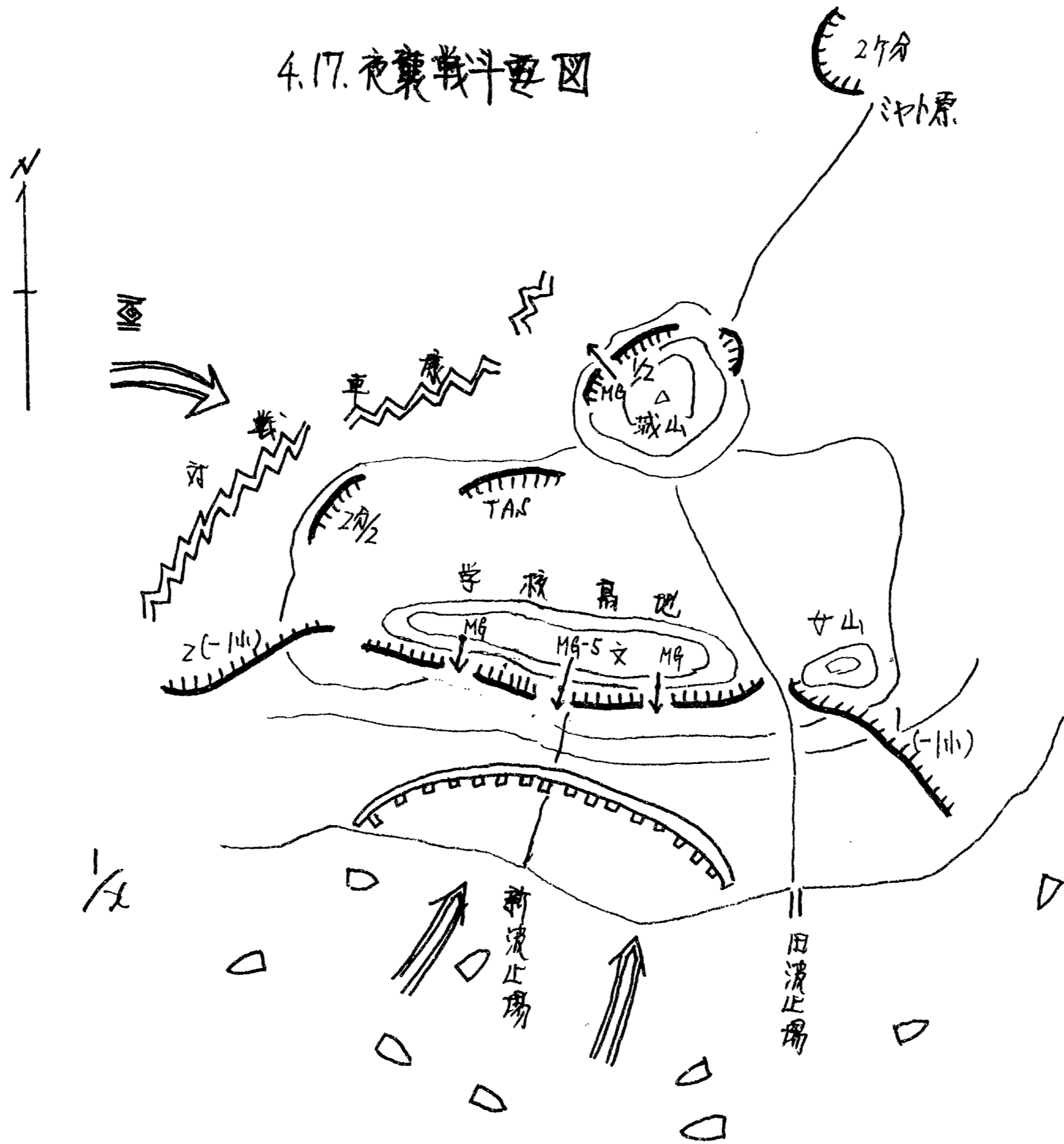
要図其の1



井川隊Z

4.17. 夜襲戦斗要図

要図其の2



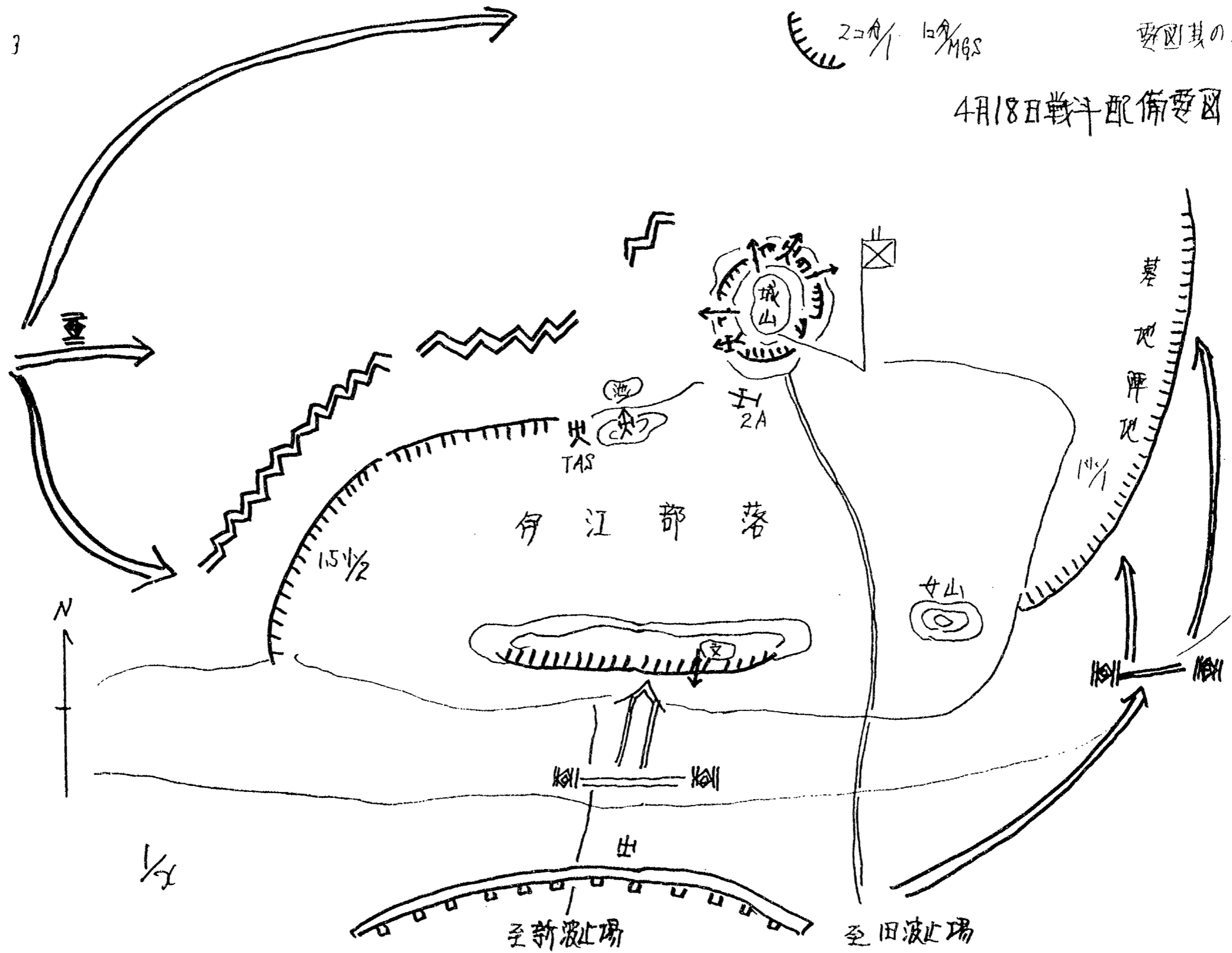
2886

井川隊 3

200/1 100/MGS

要図其の3

4月18日戦斗配備要図



2887

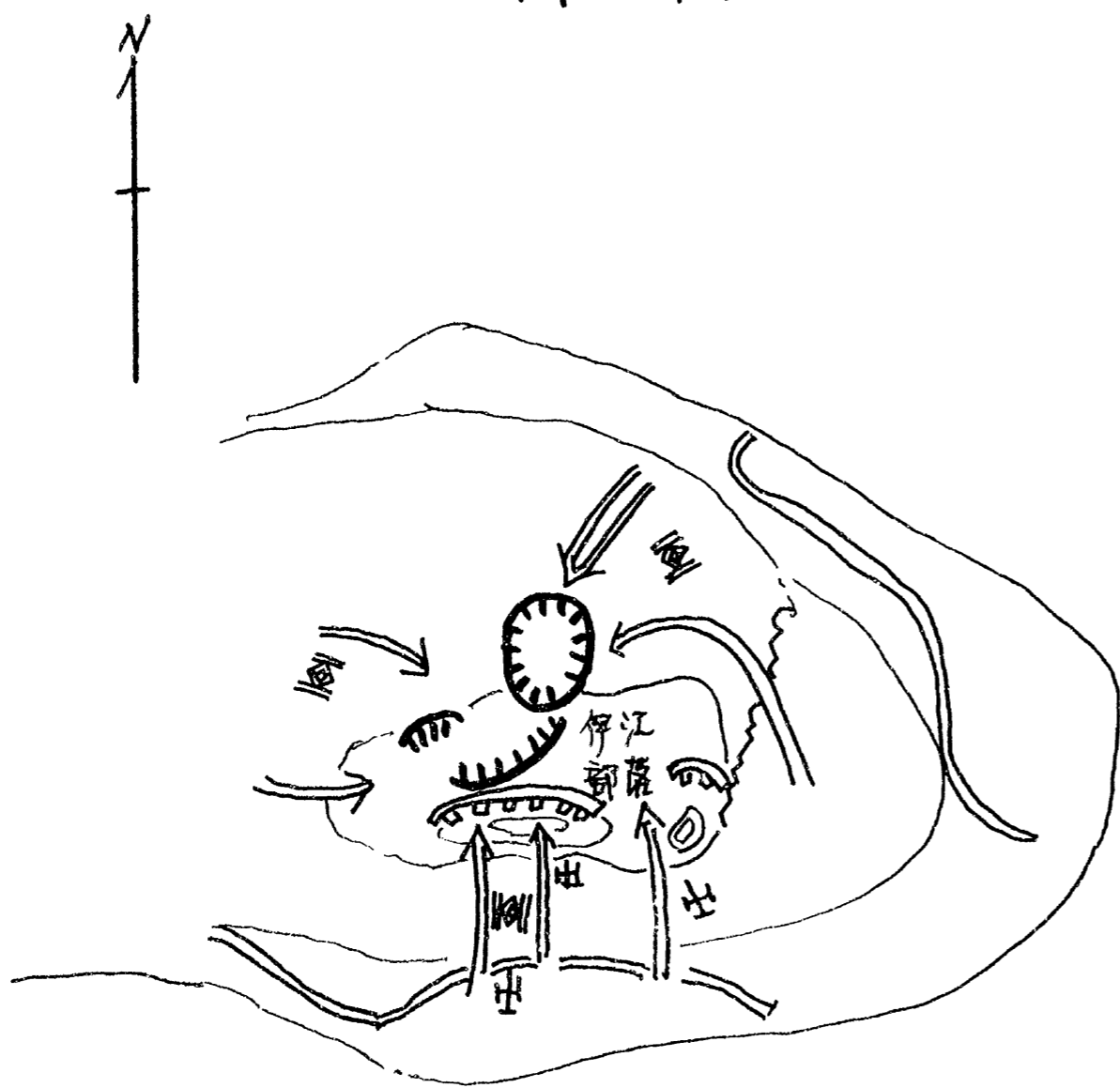
井川隊4

要図其の5

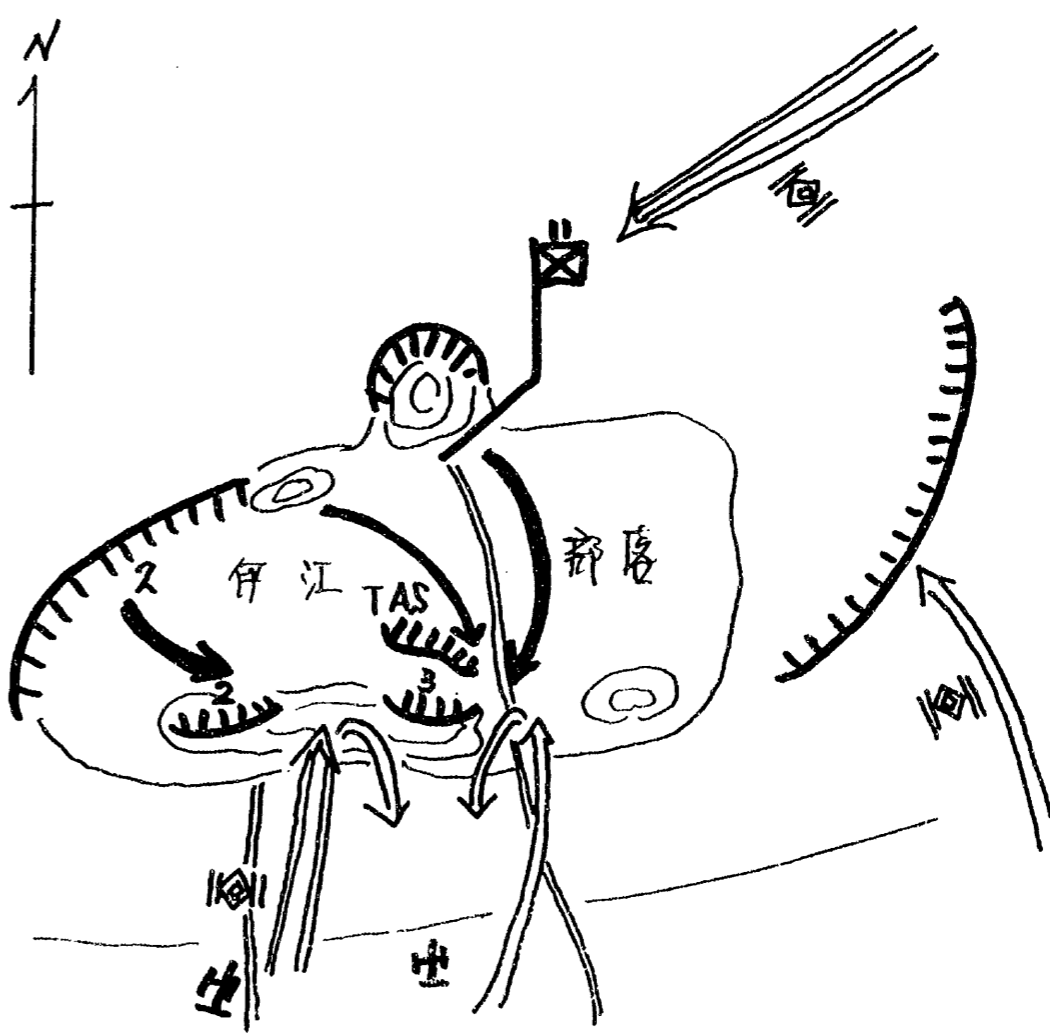
要図其の4

4.20夕の戦斗配備要図

4.19 戦斗配備要図



1/2



1/2